論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（教育学）	氏名	千菊　基司
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

英語の発話の質を高める指導のあり方
― 複雑さ・正確さ・流暢さに着目して ―

論文審査担当者

主　　査　教授　松浦　伸和
審査委員　教授　築道　和明
審査委員　教授　畑佐 由紀子
審査委員　教授　間瀬　茂夫

〔論文審査の要旨〕

本論文は，英語の口頭産出能力を高める指導のあり方を探求するため，日本の高校生を対象に，第２言語での発話の困難さを引き起こす要因を低減する指導の効果を明らかにすることを目的としている。スピーキングには，まとまりのある分量を一方向で話す発表的形態（モノローグ）と，二人以上でやり取りを行う対話的形態（ダイアローグ）があるが，それぞれの問題に対応するための効果的な指導法を提案した。

第１章では，本研究の背景，目的，論文の構成を述べた。高等学校教育現場での「話すこと」に関わる到達度や英語教員の意識の低さは英語力調査により明らかになっている。加えて新学習指導要領は，これまでよりも高い到達目標を要求しているにもかかわらず，通常の英語授業で持続可能に行えるシンプルな手順の効果的な指導が十分に実践されていない。これらのことを研究の背景として指摘した。日本の高校生を対象にしたスピーキング指導のあり方を提案する実証的研究は他の技能に比べて数が少なく，特に，やり取りに関わる指導の効果を明らかにした研究はほぼ見られないことから，本研究の意義を述べた。

第２章では，本論文で提案する指導法を検討するために，第１節で指導原理となる考え方，第２節で発話の形態の違いによる発話の困難点の違い，第３節で発話の質の記述方法，第４節でタスクを英語授業で利用するために考慮するべき点，第５節で発話の質的向上と英語授業の関わりについて先行研究を整理した。それを踏まえて第６節では，本論文の研究課題を２つ設定した。課題１はストーリーテリング言語活動を繰り返し行えば，モノローグ型の課題において，　高校生の英語発話の質は上がるか，課題２は合意形成の言語活動を繰り返し行えば，ダイアローグ型の課題において，高校生の英語発話の質は上がるか，であった。

第３章では，課題１について，高等学校２年生を対象に調査，考察した。事前，事後，遅延テストで得られた発話の分析の結果，発話の向上が事後テストの流暢さの指標において現れた。また，提示した文字情報の取り込まれ方の分析では，使用される語彙使用や情報構成において指導の効果が現れた。さらに，指導を受けた生徒の事後テストと遅延テストでの発話に聞き手に配慮する工夫が多く見られた。これは正確さや複雑さの指標における変化であり，モノローグタスクを反復させる活動時に，複雑さ，正確さ，流暢さの観点でバ

ランスよく質が確保された状態で発話が繰り返されていたと推察できる。

第４章では，課題２について高等学校２年生を対象に調査，考察した。事前，事後テストで得られた発話の分析の結果，指導の効果は流暢さの指標で見られた。ダイアローグタスクであったためか，複雑さと正確さについては明確な効果が確認されなかった。交渉の進展への寄与という点では，事後調査では異なる意見へ異議を唱える前に発言の意図を確認して相手の心情に配慮するようになったり，意見交換が行き詰まった時でも対話の進展の主導権を相手に渡さず，他の論拠を示して発言を続けたりする様子が観察されたことから，一定程度の指導の効果が確認された。

第５章では，本研究の総括を行い，教育的示唆及び今後の課題を述べた。モノローグタスクを用いた指導によって，流暢さを向上させたのみならず，聞き手に理解しやすいメッセージを作れるようになった。形式面での指導やタスクの反復によって，容易にアクセスできる言語資源が増えたため，適切な言語材料の検索が可能になったことによると考えられる。ダイアローグタスクを用いた指導によって，対話中に発話内容を調整する必要がある場面でも流暢に話せるようになった。加えて，交渉の進展を意識した発言を増加させた。形式面への指導やタスクの反復によって，言語面への認知的負荷が軽減し，対話の流れに注意を向けることが可能になったためであると解釈した。しかもそれは，合意形成に向けて積極的に関与する中で達成されていた。これらのことから，内容を考える段階での認知負担を軽減した課題に複数回取り組ませることで，学習者の意識を，内容を言語化することに向かわせることが可能になり，高校生が対象であっても，比較的短期間で，英語の口頭産出能力を高め，モノローグ課題とダイアローグ課題のいずれにおいても発話の質を向上させることができるという示唆が得られた。

本論文の独創性は以下の３点にまとめられ，学術的及び教育的意義を高く評価することができる。

１．英語教育においてはスピーキング指導の研究そのものが少ない。中でもとりわけ少ない高校生を対象としてスピーキング指導の実践研究を行ったこと。

２．広く普及できることを目指して，具体的かつシンプルなスピーキングの指導方法を開発したこと

３．スピーキング活動をモノローグ，ダイアローグの両面から捉えて調査を行い，その結果を総合的に考察したこと

本研究は，スピーキング力を単なる日常会話にとどめず，これからのグローバル社会で求められる交渉という高度な言語活動をも視野に入れ，高校生を対象に複雑さ，正確さ，流暢さの観点でスピーキング能力の伸びにどのような影響を与えるのかについて，今後の実践研究の枠組みを提示したもので，日本の英語教育において重要な教育的示唆となり，今後の課題を論じ得るものであると評価する。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 2 月 12 日